

令和8年度 文京区障害者地域自立支援協議会

第1回こども支援専門部会

日時 令和8年6月22日（月）午後1時00分から午後2時56分まで

場所 文京シビックセンター地下2階 産業とくらしプラザ 研修室AB

<会議次第>

1 開会

2 議題

(1) 障害者地域自立支援協議会こども支援専門部会について

【資料第1-1号】 【資料第1-2号】 【資料第1-3号】

(2) 令和8年度の取り組みについて

【資料第2号】

(3) 小グループディスカッションについて

3 その他

《参考資料》

- ・令和8年度自立支援協議会こども支援専門部会研修会（部会第2回）企画書
- ・研修会チラシ
- ・令和8年度 文京区障害者地域自立支援協議会こども支援専門部会員名簿

<文京区障害者地域自立支援協議会こども支援専門部会員（名簿順）>

出席者

向井 崇 部会長、勝間田 万喜 副部会長、荻野 美佐子 部会員、内海 裕美 部会員、
塚本 了介 部会員、高山 陽介 部会員、内田 千皓 部会員、高谷 通代 部会員、
柿沼 真理子 部会員、田邊 裕子 部会員、川崎 洋子 部会員、林 修也 部会員、
井上 アヤ乃 部会員、小野寺 素子 部会員、渋谷 尚希 部会員

欠席者

高山 直樹 部会員、加藤 たか子 部会員

<傍聴者>

1名

1 開会

本日の予定の説明等

2 議題

(1) 障害者地域自立支援協議会こども支援専門部会について

資料第1-1号から資料第1-3号について事務局から説明

(2) 令和8年度の取り組みについて

資料第2号について向井部会長から説明、以下グループディスカッションを踏まえた意見交換

- ・インクルーシブとは、単に「排除せず一緒にいる」ことではなく、こども同士が関わりながら互いに学び、誰かが犠牲にならないよう環境や関係性を意図的に設計することが重要である。学校現場では、こどもたちが最大限の利益を受けられるような「インクルーシブのデザイン」がまだ十分に確立されていない。

- ・文京区には多くの地域資源や支援サービスがあるが、保護者に十分伝わっていなかったり、情報収集が得意な保護者だけが活用できていたりする課題がある。そのため、教育センターなどがハブとなり、事業所やサービス情報を広く共有していくことが期待される。また、発信力のある保護者が情報共有の中心になる可能性もある。

- ・一方で、支援者同士の対話や連携が不足しており、学校との連絡をためらう場面もある。支援者同士がもっとつながり、認識を共有することが必要である。さらに、公立学校より環境が整っている私立を選ぶ家庭もあり、公立学校にも多様なこどもを支える環境づくりが求められる。

- ・コミュニティスクールのように、学校・地域・保護者が協力し、地域行事や学校運営を通じてこどもたちの安心・安全な環境をつくる取り組みは有効である。福祉の視点からも、こどもたちが地域で自立し、安心して暮らせる環境を整えることが大切である。

- ・文京区は地域が狭く、学校数も少ないため、支援者同士が顔の見える関係を築きやすいことが強みである。一方で、地域活動に関わる人が限られ、動ける人だけが動いているという課題もある。インクルーシブを実現するには、支援者や学校、地域の人々が同じ方向を向いて協力する必要がある、研修会などを通じて先生方とも共に理解を深めていくことが重要で

ある。

- ・文京区の強みは、デイサービス、保育園、教育・福祉関係機関などが充実しており、専門的な知識を持つ人材が多い点にある。また、保護者の教育水準や意識、経済力が比較的高く、自ら学ぶ力を持つ保護者が多いことも資源といえる。

- ・一方で、定型発達の子どもを含め、子どもたちを取り巻く環境には厳しさがあり、親が忙しい中で子どもとじっくり向き合えなかったり、親が先回りしてやり過ぎてしまったりすることで、こどもの力や自信が育ちにくくなっているという課題がある。文京区の保護者の意識の高さや競争的な環境が、場合によってはこどもの状況を受け入れにくくし、適切な支援につながりにくくしている面も指摘された。

- ・8月の研修会では、児童発達支援やデイサービスなどの事業所が、日々どのように子どもと関わり、家庭力を高める支援をしているのかを具体的に知りたいという意見があった。また、家庭の大変さや生きづらさの実情を理解するとともに、保育園などの関係機関と学校が連携してうまくいった事例を共有し、今後の連携や保護者支援につなげる機会にしたいという話があった。

- ・文京区の強みとして、学校現場に支援に関わる人材や教員が一定程度配置されていること、また平成の頃から「交流及び共同学習」のガイドラインが整備され、教員研修を通じて合理的配慮や特別支援教育への理解が浸透していることが挙げられた。さらに、情緒固定級や全校に設置されたアドバンスルームなど、子どもを支える仕組みが充実している点も重要な土台である。

- ・一方で、子どもや保護者の状況・ニーズが非常に多様化しており、これまでの支援体制や方法では対応が難しくなっているという課題がある。保護者の中にはフルインクルーシブを求める人もいるが、学校現場で対応できることには限界もあり、その整理が十分ではない。また、情報が多すぎるため、保護者にとって何が正しい情報なのか分かりにくく、都合のよい情報だけが取り入れられることで、学校との間に難しさが生じる場合もある。

- ・今後は、人口が大きく減らない状況も踏まえ、子どもを支える体制や人員、各機関・関係者の役割を確認しながら、学校ごとの差も含めて、関係者がつながり合って考えていく必要がある。

以下、学識経験者よりまとめ

- ・8月の研修会ではインクルーシブ教育がテーマとなるが、参加者の間で「インクルーシブ教育」や「インクルーシブ」という言葉のイメージが共有されているかが疑問。研修会の冒

頭で最低限の共通理解を確認する必要があるのではないか。

・また、この会には多様な立場や職種の人が参加しており、すぐに全てがつながるわけではないものの、研修会などを通じて少しずつ接点が生まれること自体に意義がある。各現場で何が行われ、何を大切にしているのか、他の場とどうつながるのかを理解するには時間がかかるため、地道に一つずつ積み重ねていくことが重要である。

・教育だけでなく、文京区全体として地域の大人同士のつながりを強めることが重要。高層マンションの増加や転入者の増加により、地域とのつながりが薄い区民も増えており、大人のつながりが弱いままでは、学校教育だけに負担が集中してしまう懸念がある。そのため、町会など地域活動を活性化させ、こどもたちが「自分の文京区」と感じられる居場所を、学校だけでなく地域にも広げていくことが大切である。

・文京区ではこどもの数も増えており、途中から転入してくるこどもも多い。特に、外国籍のこどもなど、言葉や文化の違いにより居場所を持ちにくいこどもを、区全体で歓迎し、安心して過ごせる環境を整える必要がある。

・また、地域でのつながりは、こどもだけでなく高齢者や大人の孤立を防ぎ、災害にも強いまちづくりにつながる。大人同士がつながることで、こども同士の関係も広がり、学校以外の場でもこどもがいきいきと過ごせる可能性がある。学力だけでなく「幸せなこども」を育てることを重視し、こどもたち自身がどうしたいのかを中心に、大人たちが協力して動いていく文京区を目指したい。